

石田千 ISHIDA sen

# つねに見送るひと

～鈴木清『流れの歌』復刻に寄せて



『流れの歌』より

汲むことを求め、等身大よりふくらませようときえする。掌中に得たいという欲求は、撮影の本来だから、当然の態度とも思う。

『流れの歌』のなかをたずねると、受身として置かれたレンズのまえに、ひとがあらわれた。もしくは、おぼろげとカメラをぶらさげるひとを見かね、迎え入れられていたように見える。

撮りたい、撮ろうという欲をつぶすことに労を費やし、被写体、撮影者、観賞者それぞれ、気やすくただよう生をさらしあう。じゃんけんのように自在、影踏みのように軽やかに、共有する写真というものが成立している。撮影者だけではなく、作品じたい、語り手ではなく聞き手になっていくのは、おおきな特色と思う。

旅芸人や、炭鉱夫の、身内にむけるような頬に触れる。彼らの目にうつった、鈴木清というひとを思う。清潔ではない、しめつた場所。暗がりや舞台裏にひかれて、そのうしろにある素をさがして歩く。

おおきな石をひっくりかえし、あわてた虫がうごめくのを見たり、祭りや夜店のおじさんになつくような少年性は、そのままにしている。しょうがないな、特別だよ。許さる、目がかがやかしているようにみえる。

撮りたいのは、身うちからあふれる強い個や言葉を、

ねじふせるような静かさ。自分じしんを、ちいさな存在と思わせてくれるもの。カメラがどどめきれないもの。そうして歳月と記憶を発見する。出生地から、各地の旅へ。活動の流れは、自然なことと思われる。旅は、幼児とおなじように、未知と世界の広さをかかえさせてくれる。交流を待つあいだは、ちいさな背丈で見たような世にいられる。そのころぼそそで、獲得する。なものだったか、なにものになるのか。答えを、いまの道にゆだねていく。

朽ちるもの、すたれるもの、置きざりになるもの、流れるものたちと雨と土の匂いやしめりけを共有し、思い出そうとまぶたをどじるかわりに、カメラでへだてる。写真家と被写体のあいだに立ち、じつと黙るカメラを、一升びんをかついだ女が見つめる。女が笑いかけた瞬間、その場のすべての存在が定まる。電柱も雲もおなじように、その距離を確保しながら撮影されている。

いつも、だれかを見送るような目の包容力。ホームに立ち、走る電車に、みずからは乗らない。駅を出て家路にむかうこともない。たとえだれもいなくても、女の部屋でも、つねに見送るひととして、すうとした風のかかにいる。心細い不安定な場所に立ち、その空気につつまれているひとりとして撮影しようとする態度と、帰る場のないひとへの共感は、とどろ

暗がりに、男の半身がうつっている。支度中の役者のように、顔を白く塗っている。笑うでも、怒るでもない。すこし眠たそうでもある。私自身と、題がある。こうこうとしたいま、ふたたび目覚めることを知っている。たような顔をしている。

◆筆者 一九六八年福島県生まれ、東京育ち。二〇〇一年「大踏切書店のこと」で第一回古本小説大賞を受賞。著書に、『月と菓子パン』（新潮文庫）、『屋上がえり』（筑摩書房）、『きんぴらふねふね』（平凡社）、『店じまい』（白水社）など。

## ▼3面に『流れの歌』詳細

■鈴木清写真展  
「百の階梯、千の来歴」  
会場：東京国立近代美術館  
会期：開催中  
～十二月十九日まで



『流れの歌』より

## 愛書狂

ひつつめ髪にメガネ、普段着はトレーナーと、超地味な女子大生を主人公にしたマンガ『野田ともしうします』（柘植文著）が抜群に面白い。第二巻では、彼女が突然、「太宰治の『津軽』って文庫本に注解が447個あるのをご存知ですか？」と言いつつ、新潮文庫版の『津軽』（九五刷）の巻末にある「親切すぎる注解」を話題にし、「呉服店」が「和服の織物を扱う店」とあるのを「そんなの知ってるよー」とからかう。ギャグマンガとは思えない内容に仰天だ。▼私が知らないかぎり、いち早く新潮文庫『津軽』に疑義を唱えたのは「週刊文春」連載エッセイ「お言葉ですが……」の高島俊男だ。「これは賤しきものなるぞ」と題して、「なんでもない語にまでかたはしから注をつける」愚を徹底批判している。しかも、ほとんどが「広辞苑」丸写しだとあきれられる（『広辞苑の神話』文春文庫に所収）▼高島の批判を受けて、現在の注解は手直しされているが、私の所持する『津軽』は、「さるまた」男が用いる、腰やまたをおおう下着の短いももひき」という珍解説。昭和四十二年版を見ると注解はない。昭和人に「さるまた」は説明不要。それだけ昭和は遠くになったのだ▼文庫の注解で目覚ましい成果を挙げたのは、岩波文庫版『浮雲』。二〇〇四年の改版時に、校注の十川信介は六六四もの注を新たに付した。「題」を「したあご。ここでは生計。『おとがいを養う』で生計を立てるの意」とし、髪型や帽子などの風俗は図版で示す。明治という時代の可視化への挑戦で、ほれほれした。（野）

意識に直接与えられているものについての試論

【新訳ベルクソン全集1】  
アンリ・ベルクソン「著」

哲学者であるとともに科学者、そして文人でもある知の巨人——ベルクソンの統一的个人完訳！ 全七巻十別巻の口火を切るのは『時間と自由』として有名な論考。

### 本邦初の個人完訳！

ルクソン哲学の出発点。感覚をはじめとするさまざまな意識状態を、どのように考えるべきか？ はたして、「生きている」とはどういうことか？ 言葉や空間を媒介させずに (im-medial)、意識に直接 (im-medial) と与えられるがままに現象を把握すること。これすなわち「持続」であり「時間」であるという直観をもとに、「自由」とは何かという問題を論じてゆく。

加賀野井秀一氏による解説、安藤礼二氏によるエッセイ、しりあがり寿氏による漫画をおさめた月報つき。  
◇竹内信夫訳 四六判 二四〇頁 定価二七三〇円 (本体二六〇〇円) 11月下旬刊

ナチに抵抗した作家——ひとたびネットで検索すれば、ケストナーにはこんな言葉が冠ざれている。一般的な認識もほぼ同じだろう。だが果たしてそうか。実際の彼はどうかだったのか。残念ながら、公刊された母親との往復書簡は伴侶ルイーズロツテにより都合よく取捨選択され、第二次大戦末期を描く終戦日記『四五年を銘記せよ』は戦後の状況に合わせて作家自身の手により訂正・加筆され、真実を伝えるものとはな

### エーリヒ・ケストナー 謎を秘めた啓蒙家の生涯

矛盾をはらんだ国民作家の実像  
真のケストナー像を求めて著者は断簡零墨に至る膨大な一次資料に直接当たり、これまで世に定着していた固定観念や思い込みを容赦なく破砕し、この矛盾に満ち謎を秘めた作家

の实像に迫ってゆく。こうして、第三帝国下の彼はどこにいて何をし、何に関心を抱き誰と交際していたか、その〈抵抗〉の真実が具体的に明かされる。〈出生〉の秘密の真実をさぐる冒頭から、母親との異常なまでの関係、複数の恋人との同時交際による〈火宅の人〉の苦悩、そしてアルコールに没する晩年まで、章を追うごとに読者は、大国民作家の綱渡り人生と作家であることの悲哀を知り瞠目することになる。ケストナー伝の決定版。  
◇藤川芳朗訳 A5判 五八〇頁 定価六八二五円 (本体六五〇〇円)

ジュディス・ヘリン「著」



### ビザンツ 驚くべき中世帝国

家でありながら、これまで日本では今ひとつなじみが薄かった。本書では、「ラヴェンナ・モザイク」「ギリシア正教」「聖像破壊運動と聖像崇敬」「ビザンツの経済」「宦官」など、政治・宗教・文化・経済などに関する二十八のテーマを時代順にならべ、西欧やイスラームとの関係とともに、立体的に解説する。七百年にわたって地中海貿易で活躍したノミスマ金貨に彫られた凶像の変化や、「書評の発明者」とい

られる九世紀の文人など、興味深い情報も多い。ビザンツの文化は当時からヨーロッパ諸国の羨望的であった反面、ヴォルテールやギボンなど、後世の思想家・歴史家から激しい中傷を受けてきた。その偏見についても、著者は原因を考察している。最近のビザンツ史研究の動向を反映し、西洋史ファンへの期待にも応える、お薦めの一冊。

◇井上浩一監訳 足立広明、中谷功治、根津由喜夫、高田良太訳 四六判 五〇〇頁 十口絵八頁 定価四六二〇円 (本体四四〇〇円)

### 輝ける地中海帝国の歴史

分裂したローマ帝国の東半分に始まり、十五世紀にオスマン・トルコに征服されるまで、千百年あまりにわたって東地中海に栄えた帝国。世界史のなかで重要な位置を占める国

を跡づけてゆく。またクリスマスツリーの成立には、十六世紀の宗教戦争や対ナポレオン戦争が関わっているという。息をもつかせぬ歴史ドラマがここにはある。

巻頭のカラー図版を始め、本文中にも貴重な図版が多数掲げられ、「クリスマス市」や「料理・お菓子」の章など、じつに楽しく読める。クリスマスは勿論、家族で楽しくクリスマスを祝いたい人々のための、各紙誌絶賛の必読書。北原照久さん推薦！  
◇四六判 一九八頁十カラー 八頁 定価二二〇〇円 (本体二〇〇〇円)

若林ひとみ「著」

師走ともなれば街角にはサンタクロースが立ち、ツリーは眩いばかりに輝く。でも、こんな見慣れた風景の歴史的背景や来歴を、私たちはどれだけ知っているのだろうか。例えば丸々と太ったニコニコ顔のサンタさんは、今からおよそ一四〇年前アメリカの政治風刺画の父とされるT・ナストによって初めて描かれたもので、それ以前はわれらがサンタさんは何ともシヨボイのだ。怖い顔してやせかけて

### ツリーはなぜ飾るの？

いたり、〈閻魔帳〉をもった司祭服姿もあれば、頭にヒイラギの冠をのせ夜道を歩くサンタさんもある。こんな姿を紹介しながら著者は、三世紀の聖ニコラウスの事跡に始まり、スペインに対するオランダ独立戦争を経て現代に至る歴史

を跡づけてゆく。またクリスマスツリーの成立には、十六世紀の宗教戦争や対ナポレオン戦争が関わっているという。息をもつかせぬ歴史ドラマがここにはある。

巻頭のカラー図版を始め、本文中にも貴重な図版が多数掲げられ、「クリスマス市」や「料理・お菓子」の章など、じつに楽しく読める。クリスマスは勿論、家族で楽しくクリスマスを祝いたい人々のための、各紙誌絶賛の必読書。北原照久さん推薦！  
◇四六判 一九八頁十カラー 八頁 定価二二〇〇円 (本体二〇〇〇円)

### 古書修復の愉しみ

本書は、アメリカの一流製本工芸・書籍修復家ウィリアム・アンソニーに女性として初めて弟子入りした著者が、書籍修復家として成長する過程を自伝的に綴った回想録である。

書籍修復、それも西洋の古い稀覯本という一般には知られざる世界について、著者は具体的な技術を含め、詳しく面白く、いきいきと描き出す。修復作業の現場から始まる書き出しから、読者は目をみはる思いで作業工程のひとつひとつをたどってゆくことになる。壊れた本の直し方について、職人の命である道具——しばしば日本の伝統的な工具や手漉き和紙である——について、著者は情熱をこめて語る。本書はまた師との出会いから

ら修業時代、そして師匠の死を乗り越え一人前の職人になるまでの一種の成長物語でもあり、失敗や苦労を含め、徒弟時代の興味深いエピソードがユーモアを交えて語られる。本が大量生産されては捨てられる時代に、貴重な古書を手で丹念に修復するという営みは、決して単なるノスタルジアではない。書物という知的財産を、数十年、数百年にわたって保存し、次代に伝えることの意味ははかりしれないほど大きい。  
◇市川恵里訳 四六判 二二〇頁 定価二九四〇円 (本体二八〇〇円)

### 1900年の「東のパリ」

陸初の地下鉄さえ敷設されていた(ちなみにパリの地下鉄開通は一九〇〇年。市街には六〇〇店をこすカフェが軒を並べ、ウィーンと同じく芸術家やジャーナリストたちはそこにたむろして談論風発し、原稿を書いた。東欧の社会史をいろいろ、文学・音楽・絵画・建築……当時の「文化人」のみならず階級構造や政治経済についても詳らかにしてゆく本書は、都市論のケーススタディのためにも貴重だ。

著者は、一九二四年のブダペスト生まれで、都市史や、両大戦期や冷戦時代の欧米史を専門とする、アメリカ在住の歴史家。マジャル文化へ、愛のある眼差しをそそぐ。  
◇早稲田みか訳 四六判 三四四頁 定価三七八〇円 (本体三六〇〇円)

哲学者であるとともに文学者・科学者でもある知の巨人——  
**ベルクソンの統一的个人完訳！**

**新訳ベルクソン全集 全7巻・別巻1**  
*Œuvres complètes de Bergson*

11月下旬刊行開始

アンリ・ベルクソン  
竹内信夫●個人訳



1 意識に直接与えられているものについての試論  
*Essai sur les données immédiates de la conscience, 1889*  
『時間と自由』として有名な論考を改題・新訳

2 物質と記憶  
*Matière et mémoire, 1896*

3 笑い  
*Le rire, 1900*

4 創造的進化  
*L'évolution créatrice, 1907*

5 精神のエネルギー  
*L'énergie spirituelle, 1919*

6 道徳と宗教の二つの源泉  
*Les deux sources de la morale et de la religion, 1932*

7 思考と動くもの  
*La pensée et le mouvant, 1934*

別巻1 人名・書名索引 用語解説集

■各巻 四六判/上製/月報付

第1回配本・11月下旬刊

以後続刊

■月報付(第1巻月報 エッセイ:安藤礼二 解説:加賀野井秀一 連載絵巻:しりあがり寿)  
■四六判 240頁 ■定価2730円(本体2600円)

「エクス・リブリス」第11回配本  
オルガ・トカルチュク「作」

歴史上、ポーランドは国境線が不安定に揺れ動いてきた国である。現在はロシア、ドイツ、チェコなどと接しているが、国境近くの町や村は、過去の

ある時点ではまったく別の名前と呼ばれていたのだ。  
本作の舞台は、ポーランドとチェコの国境地帯にある小さな町ノヴァ・ルダ。かつてはドイツ領でノイロッドと呼ばれたこの土地に夫と移り住んだ語り手は、隣人たちの交際を

## 物語る土地の記憶

通じてその地方の来歴に触れる。しばしば形而上的な空想にふけりながら、日々の覚書、回想、夢、会話、古い、聖人伝などの数々が綴られていく。  
「フラムリナ、あるいは野生の工ノキタケ」ご近所の一人は、キノコの季節になるときまづて家を訪ねてくる。アウシュヴィッツ（オシフェンチム）で買った食の作り方が披露される。  
「ペーター・ディーター」ドイツ人ペーターは、生まれ育った家を見るため、妻と国境を越



ISBN978-4-560-08093-2

える。登山の途中、心臓発作を起こして息絶えた彼の片足はチェコ側に、もう片方の足はポーランド側にあった。  
……これら百十一もの挿話によつて、ある土地をめぐる二つの幻想的な物語世界が立ち上がる。現代ポーランド文学の旗手による傑作長編。◇小椋彩訳 四六判 三八〇頁 定価二七三〇円（本体二六〇〇円）

「エクス・リブリスクラシックス」  
エミール・ゾラ「作」

政治は腐敗、無政府主義やテロが横行し、ブルジョワが隆盛を極め、労働者は貧困に喘ぐ十九世紀末のパリ。その悪徳と矛盾の町を見下ろすように、モンマルトルの丘ではサクレ・クール寺院の建設が急ピッチで進められている。そこに、信仰を失い魂を彷徨わせる神父ピエールがいた。貧民救済に奔走するある日、彼は男爵邸での爆発事故を目撃する。その現場にはなぜか、化学者である彼の



ISBN978-4-560-09302-5  
下 ISBN978-4-560-09303-2

## 知られざる名作、待望の新訳！

兄ギヨームの姿があった。『ナナ』『居酒屋』など、日本では自然主義文学作家として知られるゾラ（1850-1902）だが、ジャーナリストであり鋭い都市観察者であった彼は、全二十巻に及ぶその「ルーゴン＝マッカール叢書」において、鉄道・デパート・証券取引場など、産業革命後の近代をいち早く取り入れ、そこに生きる人間たちの真実を描きだした。本書はさらに激変した第二帝政以後の首都を描写した、連作「三都市」の二冊。フランスでもっとも読まれている古典作家ゾラの、かつて古びない小説の魅力・現代性は、本書を読めば、たちどころに理解されるはずである。◇竹中のぞみ訳 四六判 各三八〇頁 各定価三三六〇円（各本体三二〇〇円）11月下旬刊

## 文豪の食卓

宮本徳蔵「著」

相撲、歌舞伎、文学など幅広い分野での碩学として知られる著者による、知的興味あふれる「美味礼賛」。東大在学中の師弟交友から現在まで、食にまつわる多くのエピソードが開陳されている。

かつて著者は文豪の集まる荻窪近辺で、井伏鱒二郎近くに住んでいたことがある。敬愛しながらもついに訪なうことになった著者が、その井伏の微に入り細をうがった饅談義を紹介するくだりなどは、著者なら

## 知的興味あふれる「美味礼賛」

ではの視点にあふれている。「蒲焼は中串に限る」と自認する井伏が、程よい天然鰻を手土産に旧友を訪ねたものの、酔いすぎて味わえないままに終わつた。このうやむやで中途半端な気分を誘うのが、井伏文学の魅力だと肩入れしているのだ。



ISBN978-4-560-08097-9

一方の文士村は鎌倉。金子光晴の紹介状を持つて川端康成邸を訪ねたある男が、出された菓子にとまどつた。それは本郷三丁目老舗「藤むら」で売られる黄身時雨。白餡に卵黄を混ぜ合わせ、練り上げられた

鈴木清「著」



ISBN978-4-560-08100-6

鈴木清（1943-2000）という写真家を「ご存知だろうか。夢や記憶、旅や文学などをモチーフとした、緻密で重層的な作品世界を織り成す独特の写真集作りに、今日国際的な注目が集まり、ますます偉才。その知る人

## 流れの歌

ぞ知る写真家が、炭鉱夫、女工、プロレスラー、旅芸人など詩情溢れる昭和の原風景を追った、処女作にして代表作『流れの歌』（当時は自費出版・二五〇〇部限定）が、約四十年の時を経て復刻される。

## 幻の写真集、復刻！



没後十年。この秋、写真家の軌跡を統括的に紹介する初の回顧展「鈴木清写真展 百の波が訪れよう」としている。◇A4変型 布上製 収録作品八二点 九二頁 FMSクリン方式二色刷 特別小冊子付（解説・飯沢耕太郎）アートディレクション・鈴木一誌 定価五〇四〇円（本体四八〇〇円）



ISBN978-4-560-08093-3

アルベルト・マンゲル「著」

『図書館 愛書家の楽園』で、書物と人間の過去・現在・未来を透視した著者が、美術鑑賞における新たな可能性をひらく名作『セイ。絵画、写真、彫刻、建築など独自の視点で選ばれた作品群を、既存の図像学や

## 奇想の美術館

イメージを読み解く12章

## 美術鑑賞の新たな可能性

美術批評にとられず、自由奔放に読み解く魅惑の12章。紀元前から二十世紀まで、欧米を中心にさまざまな作品が取り上げられる。日常のなかに聖なる場面を描いた十五世紀ネーデルラントの画家ロベルト・カンピン。毛むくじらの顔の少女を愛らしく描いた十六世紀イタリアの画家ラヴィニア・フォンターナ。「ブラジルのミケランジェロ」とも評される天才彫刻家アレシジャディーニ。フランス革命期に理想都市を思い描いた建築家ルドゥー。二十世

紀前半、激動期のメキシコの姿を切り取ったイタリア人写真家ティナ・モドッティ。ほかに、激情の画家カラヴァッジョ、巨匠ピカソなど、彼らの人生と作品が、まるで本を読むようにして、読み解かれていく。  
私たちは美術作品を見て何を思い、考えるか。単なる謎解きにとどまらず、思わぬ角度から文学との結びつきに気づかされる。イメージの織物を読み解く愉しみを知る。三冊。カラー・モノクロ図版多数収録。  
◇野中邦子訳 A5判 四三〇頁十カラー図版三三頁 定価五〇四〇円（本体四八〇〇円）11月下旬刊

## 話題の本

朝日新聞・毎日新聞に書評掲載！

## 熊 人類との「共存」の歴史

ペルト・ブルナー著 伊達 淳訳  
熊はなぜ人に畏られ、愛され、狩猟の対象とされてきたのか？有史以来、宗教、科学、文学等の分野で特別な位置を占めてきた熊と人との関係を歴史的に考察する。 ●定価 2520 円（税込）



「武田鉄矢・今朝の三枚おろし」(文化放送他)で紹介！

## 哲学者とオオカミ 愛・死・幸福についてのレッスン

マーク・ローランズ著 今泉みね子訳  
哲学者がオオカミと共に生活しその死を看取るまでの驚異の報告。朝日新聞、NHK 週刊ブクレビュー等々で絶賛の、「人間存在を揺さぶる」話題作！ ●定価 2520 円（税込）



## 編集ごぼれ話



「今回のピックアップ本」  
四方田犬彦著  
『人、中年に到る』

担当編集者による  
小生の筆名は「犬」(いぬ)です。これはもちろん犬好きというところもありますが、最新刊『人、中年に到る』を上梓された、四方田犬彦氏への思いを込めたものでもあります。十数年前、「電影風雲」という大部の「東アジア映画監督論」の編集を担当したのがきっかけで、四方田氏の飾らない人柄と博覧強記の才能に魅せられたのです。  
昨年、四方田氏は大病を患いましたが、無事に治癒しました。以来、自らの来し方を振り返り、それを自由な文体で書いてみたという思いが募りました。専門の映画や文学の批評ではなく、ほかならぬ中年の「わたし」につ

## 迷える中年の指針となる一冊

いて書いてみたいというのが、今年二月、四方田氏はヶ月ほどオスロに出張講義に出かける機会がありました。雪に閉ざされた宿に籠もり、書物や資料を参照せずに、一気に本書を書き下ろしたのです。  
『恋愛』『本』『知識』『旅』『故郷』『国家』『老い』『死』などをテーマに、四方田氏の思念が率直に語られています。足元が覚束ない、中年反抗期の小生の進む道をはんりとして照らしてくれました。まさに新境地を迎えて綴った、四方田版『エッセー』ともいべき本書を、迷える中年諸氏が指針としていただければ幸いです。  
(担当編集者・犬)

【展覧会情報】レンパッハハウス美術館所蔵「カンディンスキーと青騎士」展  
会場：三菱一号館美術館(東京・丸の内) 会期：2010年11月23日～2011年2月6日

●関連書籍 ●『青騎士』  
カンディンスキー、フランツ・マルク共編 岡田素之、相澤正己訳  
芸術の新約聖書とも呼ばれ 20 世紀芸術に決定的な影響を与えた、美術理論文献の白眉！ 図版 155 枚、折込み楽譜 2 葉 4 頁。定価 4830 円(税込)



